

AJEQ News Letter

Association japonaise des études québécoises
日本ケベック学会ニュースレター

2014年 夏号

第5巻 第1号（年3回発行）

（特集）日本ケベック学会

奨励賞受賞者現地調査報告

2014年7月31日発行

「驚異の旅人たち」のことなど

立花英裕

6月初め、ブルターニュ・サンマロ市の文学フェスティバル「驚異の旅人たち Étonnants Voyageurs」に行ってきた。旧友イヴ・シエムラが、毎年司会の仕事をしているので、聴きに来いと誘われたのである。このフェスティバルのことは、ダニー・ラフェリエールの『ハイチ震災日記』にも出てくるし、創設者のミシェル・ルブリが2007年に『ルモンド』紙でLittérature-Mondeの宣言をして以来、現代世界文学の中心になった観がある。詳しくは、11月刊行予定の小畑先生追悼論集にラフェリエールとLittérature-Mondeを論じた拙稿を寄せたので、参照していただければ幸いである。今年（会期6月7-9日）は310人くらいの文学を中心とした著者や芸術家が招待されていた。ル・クレジオ、ダニー・ラフェリエールなどがメインの顔ぶれだった。会場は数箇所に分かれ規模の大きさに驚いた。パリのサロン・ド・リーヴルの規模と内容を凌ぐと言ってよい。ジャック・カルティエが出航した港として知られるサンマロはケベック市によく似ている。城壁内をintra-murosというが、その内側の海に面した所にある「ケベックの家La Maison du Québec」も会場だった。

数名の文学者と知り合いになった。特に、Julien Delmaireやフェミナ賞受賞の Léonora Miyanoは、素晴らしい作家だ。ケベコワも多く寄稿しているハイチ支援の雑誌 *IntranQu'illirès* のセッションの後の雑談で、Delmaire氏が「サチコ、サチコ」と言うので訊

いてみると、なんと小松祐子副会長のことではないか。なんでも、小松先生のご主人の親戚だそうである。〈世界〉文学の時代を生きていることを肌で感じた瞬間だった。

話は少し飛ぶが、3月にパリ第4大学ロミユール・フォンクア教授のゼミを訪れたら、ぼったりモントリオール大学リーズ・ゴーヴァン名誉教授に出会った。ゼミでは、ゴーヴァンさんがLittérature-Mondeをめぐる議論の詳しい紹介をし、彼女からどちらかといえば批判的な意見が提出された。ゴーヴァンさんの最新刊にも、この議論が出てくる。

パリでは、スイク社で編集もしている作家ルネ・ド・セカティ氏に会った。彼は、マリ＝クレール・ブレヤイン・チェンを何冊か編集している。アキ・シマザキの話も出て、フランスではイン・チェンよりも読まれていると言う。9月末マリ＝クレール・ブレがパリに来るそうだ。大変元気だということである。キーウエスト在住なので会える機会が少ないが、一度、AJEQの大会に招聘したいものである。



Julien Delmaire氏（左）

● 本号の内容 ●

立花会員による在外研究報告・・・1 / 2013年度日本ケベック学会奨励賞受賞者現地
研究調査成果報告・・・2 / AJEQ研究会（4月・7月）発表要旨・・・4 /
AJEQ2014年度大会プログラム・・・8 / 編集後記・・・8

AJÉQ

(特集) 2013年度 日本ケベック学会奨励賞受賞者による

現地研究調査成果報告

【報告1】

「ケベック価値憲章」論争との 遭遇

飯笹佐代子（東北文化学園大学）

2013年9月、ケベック学会奨励賞のおかげでモントリオールとケベックシティにおいて調査を行うことができた。筆者はこれまでカナダやオーストラリアを中心に、政治学的、社会学的な観点から多文化社会における共生の理念や諸政策の研究を行ってきた。その過程で、かねてより関心を寄せてきたのが、ケベックの「インターカルチュラリズム（interculturalisme）」という考え方である。今回の調査目的は、この考え方に注目しながら、いわゆる『ブシャール=テイラー報告』（2008年）（注）以降の多文化社会ケベックの動向を探ることであった。

さて、折しもモントリオールに到着した筆者を待っていたのは、当時のP.マロワ政権が提案した「ケベック価値憲章（Charte des valeurs québécoises）」をめぐる大騒動であった。これは、公務員に対して勤務中にイスラームのスカーフ、キッパ、ターバンなどの人目につく宗教的シンボルの着用を禁止するというもので、十字架も目立つ大きさであれば禁止の対象に含まれる。明らかに同憲章は、上述の『ブシャール=テイラー報告』が提唱した「開かれたライシテ（laïcité ouverte）」及びインターカルチュラリズムの方向性を否定する内容となっている。

公表前からメディアで取り沙汰されていた同憲章は、マロワ政権によって9月10日に正式発表されるやいなや、連日、新聞・テレビ報道のトップニュースを飾った。賛否をめぐって各界の論者が論争し、テレビの生放送で、G.ブシャール氏やC.テイラー氏の憲章案に対する懸念と反論も拝聴することができた。



「ケベック価値憲章」案のパフレットに示されたイラスト

宗教的シンボルのうち上3つは許容、下5つは禁止とされる

出典：Parce que nos valeurs, on y croit: propositions gouvernementales, Gouvernement du Québec, septembre 2013, p.5.

研究者にとって、こうした重要な政治論争を現地でつぶさに観察できることはきわめて貴重である。インターネットがいくら発達しても、日本からネット上でニュースを追うだけでは当然ながら実際の臨場感からは程遠い。今回、偶然にも「ケベック価値憲章」論争の渦中にケベック滞在の機会を得、現地調査の醍醐味を存分に堪能することができた幸運に心より感謝したい。

ところで、同憲章は2013年11月に第60号法案として州議会に上程されたが、周知のように今年4月の州議会総選挙においてマロワ政権が敗北を喫したため、日の目を見ない結果となった。とはいえ、公務員に対する宗教的シンボルの禁止がケベック社会で一定程度の支持を得ていたことは看過できない。そのことをどのように捉えるべきなのか。宗教という視点から多文化社会を考察する上でも、ケベック社会の動向は多くの示唆を与えてくれるだろう。



「価値憲章」に関するケベックの新聞記事
(飯笹会員撮影)

注：J. シャレ政権時代の諮問委員会の報告書。
Bouchard, Gérard et Taylor, Charles (2008) *Fonder l'avenir: Le temps de la conciliation*, Gouvernement du Québec (要約版の邦訳として『多文化社会ケベックの挑戦——文化的差異に関する調和の実践 ブシャール=テイラー報告』(竹中豊・飯笹佐代子・矢頭典枝訳) 明石書店、2011年。

【報告2】

モンREALの文化モザイクを創り出す移民たちを追って

山口いずみ(津田塾大学)

2013年度日本ケベック学会奨励賞をいただき、2014年2月17日から2週間、モンREALに行って参りました。久しぶりのケベック州滞在だというのは、どうしてもこの時期しか都合がつかず、体感温度マイナス20度超えを覚悟しての出発。しかしラッキーなことに極寒日は数日で、時折は帽子をとって歩けるくらい(0度を超えた日もありました!)の穏やかな天気でした。

滞在の主な目的は、約10年前、博士論文執筆の際にインタビューを行った中国系二世のアイデンティティについて、追跡調査を行うことでした。29人のうち再会できたのは12人、連絡がとれなかったのが9人。残りのインタビュー協力者は、連絡はとれたものの、時間の都合がつかなかったり、遠方へ引っ越していたり、海外出張中であったり。インタビュー協力者の多くは30代後半となり、新たなライフ・ステージ(キャリアの積み重ね、自身の家庭の構築など)を迎え、忙しさに拍車がかかっていました。

パーソナル・レヴェルだけでなく、中国系という集団レヴェルでも、この10年で変化はみられます。2011年の国勢調査によれば、ケベック州において、中国系はユダヤ系を抜き、イタリア系、ハイチ系に次ぐ第三のエスニック集団を構成しています。2013年には、中国はフランスを抜き、同州への移民の出自国第一位となりました。とはいえ、この間中国系がメディアの話題に上ることは比較的少なく、「良識的な妥協」論争ではイスラム教徒が主な対象でしたし、人権委員会が人種差別の対象となる集団として指摘しているのは、イスラム教徒の他に、黒人、ラテン・アメリカや南アジア、アラブ出自の者、そして先住民族です。以前よりもさらに、中国系に対する「模範的なマイノリティ」としてのイメージが強化されているようです。



モンREALにある中国系の教会(Montreal Chinese Alliance Church)の前で。(山口会員撮影)

こうした時間に伴う変化がアイデンティティに与える影響はどのようなものなのでしょうか。彼らのアイデンティティの構成、とりわけ「中国系」と「ケベコワ」、「カナディアン」という境界に変化はみられたのでしょうか。このようなリサーチ・クエスチョンのもと、ただいまインタビュー・データを分析しています。2014年度中に何らかの形で発表したいと考えています。このような貴重な機会を与えてくださった日本ケベック学会の助成に心から御礼申し上げます。

日本ケベック学会奨励賞とは

日本ケベック学会奨励賞（2014年度より「小畑ケベック研究奨励賞」に改称）は日本とカナダ・ケベック州との学術交流の促進を目的として、日本ケベック学会がケベック州政府の協力を得て、新進の研究者の優れた研究プロジェクトおよび論文等の業績にたいして授与するものです。

通常、4月～5月の間に募集要項が発表され、7月に受賞者が決定されます。また、例年10月のAJEQ大会の際に、奨励賞授与式が行われ、研究奨励のための賞金が授与されます。

本奨励賞は、候補者を推薦する形で選考が行われますが、推薦資格は自薦・他薦を問いません。また、推薦者・被推薦者ともに日本ケベック学会の会員である必要があり、博士前期課程に在籍する大学院生、または研究者（博士後期課程在籍者を含む）を対象としています。

詳細につきましては、日本ケベック学会HPの該当項目をご覧ください。

2014年度第1回AJEQ研究会

4月26日（土）開催

発表要旨

「カナダ連邦政治とケベック政治闘争ーカナダ1982年憲法を巡る政治過程ー」

荒木隆人（京都大学）

「マルチナショナル連邦制」は、一つのネーションから構成される国家、いわゆる国民国家論の再検討を志向する諸々の研究において、今日広く議論されるようになっているが、その源流の一つは、カナダ連邦政府とカナダ連邦の一つの州であるケベック州との1982年憲法制定を巡る政治闘争の中で生じたものである。本報告はこの「憲法闘争」を検討し、さらにこの「憲法闘争」の渦中に登場したケベック州政府の独自の人権理解、とりわけ言語権の主張の政治的な特徴を明らかにすることで、カナダの「マルチナショナル連邦制」論に新たな像を提示しようとするものである。

1960年代後半にケベック自由党が主張した憲法構想である「特別の地位」や、ケベック自由党を脱退し、ケベック党を結成することになるルネ・レヴェックが主張した「主権連合」という立場と、個人の権利を基にしてこれらの構想を認めない連邦首相ピエール・E・トルドーの「均等連邦制」の立場が対立を続けた歴史を詳細に分析し、ケベック州の立場が言語などの「集団的権利」を優先し、議会による政治的な保証を求めたのに対して、トルドーはあくまで個人的な権利を重視し、司法の決定が最終的な判断になるという点で、根本的な違いがあるように見えることを指摘した。



最近の研究会の様子（AJEQブログより）



しかしながら、結論としては、「憲法闘争」におけるケベック州側の代表者であったルネ・レヴェックが主張する立場を詳しく検討すると、それは必ずしも言語のような集団的な権利を個人的権利よりも優先させる考え方ではなく、むしろ個人の権利を言語という手段を通じて実現しようとする面も強く持っており、そこに注目すれば、レヴェックが主張した立場は、個人的な権利と集団的な権利を相互補完的に発展させるというアプローチと解釈できる。そこでは、個人的権利が絶え間なく変化し、その権利を定める上ですべての個人が参加できる政治制度が要請されている。以上のように、ケベック州が主張する言語権を再検討することで、マルチナショナル連邦制に正当性を付与することができるのではないかと、というのが本発表の趣旨である。

参考文献

荒木隆人(2011)「ケベック言語法を巡る政治闘争—集団の権利と個人の権利の相克—」『ケベック研究』第3号、43-63頁。

P・E・トルドー(1991)『連邦主義の思想と構造』(田中浩、加藤普章訳)御茶の水書房。

アラン＝ガニョン、ラファエル・イアコヴィーノ(2012)『マルチナショナリズム—ケベックとカナダ・連邦制・シティズンシップ』(丹羽卓、古地順一郎、柳原克行訳)彩流社。



荒木会員お勧めの文献のひとつ『マルチナショナリズム』
(丹羽卓会員による監修)

【研究発表1】 ケベック州議会選挙とその後に関する時事評論

古地順一郎(北海道教育大学)

本報告では、4月に行われた州議会選挙を中心にケベック政治情勢に関する解説を行った。州議会選挙については、ケベック党(PQ)が惨敗した理由を、同党と有権者の乖離という視点から説明を試みた。その要点は2つある。第1の理由は、「ケベック価値憲章」をめぐる論争を機にPQの支持率が増加したことに味を占め、選挙戦でもアイデンティティ政治に拘泥したことである。選挙期間中の世論調査でも、有権者が経済、雇用創出、医療、財政再建を一貫して重視していたことは明らかであった。PQも政権公約でこれらの点に言及はしていたものの、アイデンティティの問題を前面に出す姿勢に変化は見られなかった。

第2の理由は、ケベックの独立をめぐるレファレンダムが選挙の争点として突如浮上したことである。今回の選挙では、メディア王で州財界の大物であるペラドー(Pierre-Karl Péladeau)氏がPQから立候補した。マロワ首相自らが口説き落としたペラドー氏は、次期PQ政権の経済政策を担う切り札候補とされ、将来の党首選への意欲も見せたことも含めて大きな注目を集めた。そのペラドー候補が、立候補会見でケベックの独立を目指すと公言したことで、レファレンダムの有無が争点化することとなった。マロワ首相は火消しに努めたが、野党はこの機を逃さずPQを攻め立てた。党内の強硬派と世論の板ばさみの中、曖昧な回答に終始するマロワ首相を尻目に、選挙戦は「レファレンダムに関するレファレンダム」とも称されるようになっていった。

アイデンティティ政治で既に有権者と乖離していたPQは、レファレンダムの争点化で更なる支持を失い、最終的には1970年州議会選挙レベルの低い得票率となり惨敗、マロワ首相自身も落選した。今後、PQと主権主義運動は抜本的な出直しを迫られるであろう。ただ、若者の間では主権主義運動に対する支持が低迷しているのみならず、運動主体としてのPQに対する支持も低下しており前途は厳しい。その一方で、PQの姉妹政党であるケベック連合(BQ)は強硬派を新党首に選出し純化を強めているように見える。PQ内部でも党首選に向けて強硬派と穏健派の駆け引きが激しくなるであろうが、党首選の結果如何によっては、PQと主権主義運動の将来、ひいてはケベック州政治に大きな影響を与えるかもしれない。

参考文献

Bastien, Frédérick et al. dirs. (2013) *Les Québécois aux urnes. Les partis, les médias et les citoyens en campagne*, Montréal, Les Presses de l'Université de Montréal.

Montigny, Éric (2011) *Leadership et militantisme au Parti québécois*, Québec, Les Presses de l'Université Laval.

AJEQ 研究会とは

AJEQ では、会員の皆様のケベックに関する研究の発表の場として、年に4回の割合(4月、7月、12月、3月)で、研究会を開催しています。会員でなくとも、研究会に参加することは可能ですので、ケベックに関心にある方をお誘いあわせの上、是非、ご参加ください。また、随時、研究会での発表者を募集しております。詳細につきましては、企画委員会(ajeq_jimu@yahoo.co.jp)までお問い合わせください。

【研究発表2】 ケベック映画のヌーヴェル・ヴァーグ ～ ミシェル・ブローからグザヴィエ・ドランまで

"Nouvelle vague du cinéma québécois -- de Michel BRAULT à Xavier DOLAN"

杉原 賢彦(映画評論家、大学講師)

ケベック映画の始まりはどこにあるのか?

1939年、カナダ政府は国策として、映画によるカナダ国家の宣伝を行う目的で「カナダ国立映画庁(National Film Board of Canada = NFB, Office National du Film du Canada = ONF)」を設立。やがて1956年、その本部がオタワよりモントリオールに移されるとともに、のちにケベック州知事となるジャン・ルサージュらが始めた「静かなる革命(la Révolution tranquille)」の機運が芽生える。そして1958年、NFB / ONF内においてテレビ向けドキュメンタリー「Candid Eye」シリーズを制作していたミシェル・ブローとジル・グルーによって『Les Raquetteurs』という短編ドキュメンタリーが撮られた。全編、手もちカメラによる撮影と小型録音機による同時録音という世界初の試みによって、ケベックの冬祭りをダイレクトに記録したこの作品こそ、ドキュメンタリー映画の世界に革命をもたらした、のちに〈ダイレクト・シネマ(Direct cinema)〉として大きな影響を世界中の映画人に与えてゆくことになる。



Les Raquetteurs より





À tout prendre より

その最たるものが、フランスのヌーヴェル・ヴァーグと同時進行状態にあった、ジャン・ルーシュらによる〈シネマ・ヴェリテ（Cinéma vérité）〉運動だった。数々のアフリカをめぐるドキュメンタリー作品で知られ、人類学者でもあるジャン・ルーシュは、記録メディアとして映画を採用し、そのフィールドワーク活動のなかで実践するのだが、1961年、哲学者にして社会学者でもあるエドガール・モランとともに『ある夏の記録（Chronique d'un été）』を撮る。パリの街頭で「あなたは幸せですか？」という質問を發し、その答えを記録してゆくなかで、『Les Raquetteurs』と同様の撮影と録音技術を採用。それにはこの映画の最大の協力者と言えるミシェル・ブローの存在が大きく関与していた。

ダイレクト・シネマの手法は、シネマ・ヴェリテ、さらにはヌーヴェル・ヴァーグにも影響をおよぼしながら、ケベック映画の成立と発展にも大きく寄与する。ブローとともにNFB / ONFにおいて活動を行っていたクロード・ジュトラは、ルーシュと交流を図る一方、ブローとの共同監督作品『La Lutte』（1961）、ブロー作品に協力した『Les Enfants du silence』（1962）を経て、1963年、『À tout prendre』でダイレクト・シネマの手法を初めて長編劇映画に応用する。また、この同じ年、それまでラジオの世界にいたピエール・ペローがブローらの活動に合流し、協働監督作品『世界の存続のために（Pour la suite du monde）』を、固有の文化が残るクードル島に撮る。

ブロー、ジュトラ、そしてペローという3人を中心に、ダイレクト・シネマの流れは1960年代を貫き、やがてカナダのなかに英語圏とは異なる独自のケベック映画を成立せしめ、発展させる源泉となっていた。

ケベック映画を知るために

・Helen Faradji によるケベック映画概略案内
<http://www.festival-cannes.fr/fr/article/58757.html>

・Youtube 上の ONF チャンネル（公式な作品視聴チャンネル）
<https://www.youtube.com/user/onf>

・なお、近年、日本で企画されたケベック関連映画祭、特集上映としては以下のものがある

「知られざる NFB / ONF ドキュメンタリズム」（2008年） *現在、サイトは閉鎖

「ケベック映画祭2009」（2009年）
<http://www.kinder.co.jp/quebec/>

「ボンジュール★ケベック！ シネマ・ウィーク in 沖縄」（2012年）
https://sites.google.com/a/kukuruvision.com/bonjour_quebec/info

「第10回カナダ・アニメーション・フェスティバル カナダ国立映画庁創立70周年」（2009年）
<http://homepage1.nifty.com/tollywood/caf10/caf10.html>



Pour la suite du monde より

日本ケベック学会2014年度大会
10月12日（日）開催
於 立教大学

来る10月12日（日）に立教大学において、日本ケベック学会2014年度大会が開催されます。詳しいプログラムは追って会員の皆様にお届けいたしますが、一足早く、本年度の大会の概要をお知らせいたします。（事情により、変更することもありますので、ご了承ください。）

9:30 受付開始

10:00 開会式

10:15-11:45 自由論題

11:45- 昼食

12:00-13:00 総会

13:00-14:15 基調講演

Marcel Martel (Université York)

«L'étrangeté des rapports entre le Québec et les communautés francophones en milieu minoritaire»

14:30-16:30 シンポジウム「フランコフォニーとケベック」

17:00 閉会式

17:30 懇親会

● 本号1 ページ目の背景写真

「ブルターニュ・サンマロ市にある
ケベックの家」（立花英裕会員撮影）



●編集後記●

この夏号から、より会員の皆様のケベックに関する研究活動を支援するための媒体となるよう、ニュースレターの内容を刷新いたしました。AJEQの諸研究活動の活発さが、伝わってくると思います。今後は、会員の皆様のご著書やお勧めのケベック研究関連文献などの紹介も行っていきたいと思いますので、ご自分のご著書について、または、お勧めの文献について、ご紹介いただける方は、是非、ご寄稿をお願いいたします。

最後になりましたが、学期末のお忙しい中、ご寄稿いただきました執筆者の方々に、心よりお礼申し上げます。

日本ケベック学会（2014年7月現在）

●主要役員

小倉和子（会長）

立花英裕（副会長）

小松祐子（副会長）

C・ドゥロンジェ

（顧問・ケベック州
政府在日事務所代表）

●広報委員

宮尾尊弘

小松祐子

安田 敬

山出裕子

D・シッシュ

AJEQニュースレター
年3回発行
発行人・小倉和子
編集人・山出裕子
日本ケベック学会

